# 第八章　夏祭り

1.

翌日から祭りまでの数日は、まさしくてんやわんやだった。ただでさえ考えなければならないことが山ほどあったのに、それを忘れてしまうほどの忙しさであった。

まず最初に、祐理名さんを追跡した翌日の八月一日。

伊吹の母親から、久しぶりに電話が掛かってきた。

『もしもし？　ああ、伊吹？』

夕食前、廊下に置いてある今時珍しい据え置き型の電話の受話器を取ると、そんないつも通りせわしない響きを持った、母親の声が聞こえてきた。声の向こうには、雑踏の音がある。たぶん今日も、有楽町辺りの駅前から掛けてきているのだろう。

『おばあちゃんはいる？』

「ああ……たぶん。呼んでくるか？」

『んー、まあいいわ。また後で掛け直すから。伊吹にも用事あったし。何どうしたの、まだ調子悪いの？　事故の後遺症とか残ってないわよね？』

「事故……？　ああ。そんなこともあったな」

『ホントに大丈夫？　全然キレがないじゃない。無事だって聞いたから、勝手に安心してたんだけど。何かあったら言いなさいね』

母親の声は聞き取りにくい。元々早口だし、周囲がうるさすぎた。東京に住んでいた頃は、伊吹もこれぐらいの雑音はどうとも思わなかったものだが、こくりのに住みだして四ヶ月も経つと、がやがやという大人数の声だけでも耳慣れなく感じられる。

『最近どうなの？　元気にしてる？』

「まあ、一応」

『彼氏ぐらい出来た？』

冗談めいた声音で訊いてくる。伊吹は言葉に詰まった。

「ん？　んー……」

『え、何、ホントに出来たの？　ウソ、すごいじゃない。それだけはない

と思って訊いたんだけど。どんな子なの？　紹介してよ』
「いや、まだ別にそんな付き合っているとかそういうのじゃなくて……ちょっと、声を掛けられただけだ」
『奇跡的じゃない。伊吹は美人だけど恋人とかとは無縁だろうと思ってたからなあ。お母さんびっくりだわ。あ、でも、こっちを抑圧してくるような男だけは絶対に付き合っちゃ駄目よ。対等に話せる男じゃないと。でもそんないい男、滅多にいないからね。諦めた方がいいかも』
　応援しているのか何なのかよく分からない。相変わらずだと伊吹は思った。
『紅葉はどうなの？　伊吹から見て』
「紅葉はのんびり家事をして、ゆったり過ごしている。学校へ行っていなくても、結構楽しそうだ」
『あの子はねー……ちょっと高校は難しかったか。生活ＩＱは高い子なんだけど、勉強とかテストになると、さっぱりみたいだからねえ。仕方ないわね。まあ、将来のことは今度おばあちゃんと相談するかな。他はどう？』
「叔父は相変わらずファンキーだ。紀乃はダメ人間だ。梨音さんとはあまり話さないから分からない。みわはよく動くサルみたいになってきた。ほたるはどんどん綺麗になっている。祖父は、最近亡くなる人が多いから忙しい。祖母も忙しい。曾祖母は見かけない。以上だ」
『ああ、あの殺人事件か……檀家さんでも亡くなってるよねぇ。最近は報道見かけないけど』
「いや、その事件以外でも亡くなる人が多いのだ。行方不明とか……」
　近頃では、不安になったお年寄りのために、三弥和尚は寺や公民館で講話の会を開いていた。平たく仏の教えを説いて、人々を安心させるのである。そこそこの人数が集まってきていて、こうした田舎では仏教も十分に力を保っているのだな、と伊吹は内心感心していた。
『へぇ。この頃は地方の方が治安危なかったりするからねえ。伊吹も気を付けなさいね』
「分かった。ありがとう」
　伊吹がそう応じると、電話の向こうの母親はしばらく沈黙した。
　伊吹は怪訝に問う。

「どうしたのだ？」
『伊吹らしくないね。どうしたの。さっきから言葉遣いがそうだけど……ありがとう、なんて。珍しい。なんか、優しくなったね』
　伊吹は少し顔を赤くした。
「そんな、ことは、ない」
『ははあ、彼氏のおかげか』
「だから彼氏ではない！」
『いいじゃないの。あなた対人関係苦手なんだから。いろいろ教えてもらいなさい。あ、でも、節度のある健全なお付き合いじゃなきゃ駄目よ。夏休みの開放感ですっ飛ばしたりしたら』
「何を言っているのだ……」
　伊吹は受話器のコードをいじりながら、ため息を吐いた。
「そちらは、どうなのだ？」
『ん？　お母さん？　仕事は順調。出版業界自体は相変わらずだけど。うちの部署は十年後ぐらいのことを考えていればいいからねー。逆に気が楽かも。来週からまたアメリカに出張だし。うちの本で何か欲しいのあったら送ってあげるから、遠慮なくいいなさいね』
「分かった。あと、その……」
『……お父さんの方ね。そう、この話がしたくて電話したのよ。そうそう思い出した。離婚の調停の方は順調なんだけど。どうもあの人、伊吹がそっちに移ってるって見当付けてるみたいなのね。たぶん、今すぐどうこうするつもりはないと思うけど……電話ぐらいは掛けてくるかも。そっちに、人類学者か民俗学者の知り合いがいるらしくって、その人経由で網張ってくるかも知れない。気を付けて』
「……その先生なら、先月亡くなった。話さなかったか？」
『え？　そうなの？　それならいいけど……でもどこに繋がりがあるか分からない人だから。直接あなたに電話掛けて、揺さぶってくるかも知れないけど……今の伊吹なら、もう大丈夫よね』
「……ああ」
　伊吹は頷いた。あの父親のこと、いずれは伊吹の行き先を突き止めるであろうことは予想していた。遅すぎたぐらいである。小学生中学生の頃な

ら、何もかも父親の思い通りにされてしまったが、今はもうそうはいかない。

――絶対にそうはさせない。

『それならいいわ。あなたは、あなたの人生を生きなさい。あとは……あーそうだそうだ。今月中にはそっちに一度帰れると思うから。一泊ぐらいは何とか出来るかな。また直前になったら連絡するから、その時はよろしくね。それじゃ、またね。伊吹、しっかりね』

そう言うと、電話は唐突に切れた。

伊吹はつまらなそうに受話器を元に戻す。母親は相変わらずだった。賢いし仕事も出来る人なのだが、どうにもせっかちで困る。東京で働く分にはあれぐらいの素早さが必要なのかも知れないが、学問には向いていないな、と思った。そして、どうしてあんな人がこんなのんびりした寺に生まれたのだろう、と首を傾げた。自分も含め、似た人間が見あたらない。

首を捻りながら居間に戻ると、テレビの前に陣取ったすぅくんが、昨日帰ってきてからお気に入りのＣＳ放送『大相撲名取り組み選』を見て喜んでいた。そこで、ああそういえば、すぅくんのことを話し忘れた、と伊吹は思った。前回の電話は、すぅくんが家に来る前だったはずだ。

しかしだからといって、この子のことをどう紹介したらいいのか、どこまで伝えたらいいのか、伊吹も見当が付かない。今までの流れを説明するのも億劫だった。

それに加えて――昨日、伊吹が吉野にキスされて以来、少しすぅくんの態度が他人行儀になった気がしていた。気のせいかも知れない。思いこみかも知れないが、前のようにべたべたくっついてはこなくなった。昨日もお風呂でもはしゃいでいなかったし、一緒に布団に入っても、抱きついてこなかった。今も、伊吹にずっと背中を向けている。だから、あまり話題にする気にはなれなかった。

伊吹は何とも物足りない気持ちで、すぅくんの小さな背中を見つめていた。

2.

八月も四日が過ぎると、夏祭りにどうやって参加するかを具体的に詰めることになった。主にこうしたことに積極的な紺から、圧倒的に多数のメールが一斉送信で押し寄せてくる。

何を着ていくか、何を持っていくか、どこに集まるか、何時に集まるか、どういうメンバーで行くか、無限に決め事を思いつくらしく、何通読んでもきりがなかった。伊吹はそのうち数通を読み飛ばし、数通に返事を忘れ、紺から掛かってきた電話に出て叱られた。伊吹は普段あまり、携帯電話を見る習慣がないのである。

そういえば、一つ気になる電話もあった。これは紺からではなく、珍しく澄哉からのものだった。伊吹がパソコンで地元のニュースを調べているときに、掛かってきた。

『もしもし、伊吹ちゃん？』

「私の携帯に掛けているのだから私に決まっているだろう」

『あ、そうだね、ごめん……あの、今ちょっといいかな。実は、面白い伝承の記録を見つけたんだ。前『るーじゅ』で話したみたいな、鬼の伝説なんだけど』

「……おい澄哉。お前は私と同じ、『鬼はいない』陣営ではなかったのか。前から思っていたが、鬼がいるであろう証拠ばかり示している気がするぞ」

『え！　あ、そ、そうだね……ど、どうしようか。やめようか……』

「いいから。話してみなさい」

『あー、うん。その、これもたまたま見つけた本に載ってたんだけど。人喰い鬼の話なんだ』

気軽な調子で言った澄哉の言葉に、伊吹は携帯を握りしめた。

眉を顰める。

「人食い……？」

『うん。怖い話なんだけどね。ちょっと悲しいというか。あのね……これは鎌倉時代の話らしいんだけど。この辺りを治めていた地方領主の元に勤めていた、一人の足軽がいた。この時代の侍は、今僕らがイメージするような武士とは違って、農民に毛が生えたような下っ端に過ぎなかったんだ。食うや食わずで生活も大変だったけれど、でも優しい性格だった彼は、雑役をこなしながら働いていた。嫁をもらい、一人の子どもを育て、質素に

暮らしていた』

　電話の向こうから聞こえてくるのは、あくまでもいつものように柔らかな澄哉の声音だった。

『ところがあるとき、男の元に奇妙な女が現れた……あ、ちょっと長くなるけど、いい？』

「いい。続けなさい」

『うん。その奇妙な女は、遊女らしく艶やかな容姿をし、匂い立つような色気を放っていた……遊女って何だろ、遊んでばっかりいるのかな。とにかく、その女に誘われた男は、ふらふらと女の家に行き、帰ることなく、数夜を共にした。ゲームとかしてたんだろうね。それで、心配した妻や同僚が迎えに行ったが、男は出てくる様子がなかった。業を煮やした領主が武士を三人差し向け、その女の家の中へ踏み込ませると、そこにはすでに、男の姿はなかった』

「……」

　伊吹は口を噤み、あの禍々しい鬼の姿を思い浮かべながら、話を聞いている。

『代わりにそこにいたのは……眼をぎょろつかせ血走らせて、歯を剥き出しにした、奇怪な化け物だった。家の中には血が飛び散っており、女のバラバラになった死体が転がっていた。死んだ女の首は、笑みを浮かべていたという。奇怪な化け物は、武士たちを眼にするやいなや、ただちに飛びついて、頭から丸かじりにして食べてしまった。二人までが食べられてしまったところで、残る一人は命からがら、家から逃げ出した……もちろんこの化け物が、あの温厚な足軽なんだ』

　あの日、渡邊教授の家の庭で見た、鬼の虚ろな顔を思い出す。

『けれど化け物、いや、その鬼は、後を追って遊女の家から出るなり、そばで見守っていた妻を押し倒し、むさぼり食ってしまう。さらにその隣にいた自らの子どもも片手で掴むと、一呑みにしてしまう。人を食べる度に鬼は、身体をむくむくと大きくしていった。一方、何とか逃げ出した領主は土地を護るため、手持ちの武士を総動員して、鬼の征伐を行おうとした。だが、来る武士を片っ端から手にとっては食べてしまう鬼に、彼らは手出しのしようがなかった。しまいには恐ろしくなって、みな逃げ出してしま

う。一人食べる事に一人分身体を大きくしていく鬼は、いつしか見上げるほどの巨体になっていった。しかし、大きくなればなるほどに、なぜか鬼の眼は虚ろで、孤独で、寂しげになっていった。ある意味では当然かも知れないね。だって、食べれば食べるほどに、鬼の周りから人はいなくなっていくのだから……』

そこで最後にやってきたのが、賀茂寺の修験者である、って書いてあるよ、と澄哉は少し嬉しそうに告げた。伊吹は何も応えない。

『修験者は鬼を誘導して、人気のない山まで連れて行った。そして、その昔自らの先祖が地に跋扈していた鬼を封じた社のある洞穴まで連れてくると、正面から向き合った。彼は鬼に向かって、私を呑んでみなさい、ただし食べるならば一息で呑みなさい、と言った。鬼はその言葉に従い、修験者を頭から丸呑みにした。修験者は、鬼の腹の中に入った』

「え？」

『腹に入った修験者は、死んでしまう前に一心に呪文を唱えた。しばらくはその洞穴の中で一人寂しげにしていた鬼だったが、次第に自分の身体が縮んできていることに気がついた。徐々に小さくなり、痩せ細り、元の人間ほどの大きさになった鬼は、諦めたように自ら社の戸を開くと、その中へと入っていった。そうして、自身で自身を封じた。隠野に、平安が戻った』

伊吹は目を落とし、その悲しい話を聞いていた。

『っていうお話なんだけど……どうかな。面白い、よね？』

「ああ」

「不思議なお話だな、って思ってさ。どうして女の人と一緒にいると鬼になってしまうんだろう、とか、なんで自分で自分を封印したんだろう、とか、よく分からないところがたくさんあるんだけど……でも、僕この話、結構好きだな、って思ったんだ。伊吹ちゃんも、たぶんご先祖様らしい人が出てきて、食べられちゃうけど……でも、どうだった？」

「ああ。いいと思う」

人間が鬼になる、という話は、二度にわたって宇治川から聞いた。人は、誰もが鬼になりうる。むしろ、その鬼の姿の方が、人らしい姿なのではないか。そういう話だった。

夜、金網越しにすぅくんと一緒に見た、森の中の鬼を思い浮かべる。
誰かを求めて、うろうろと彷徨っているように見えた。
伊吹は、よい話を聞かせてくれた礼を言うと、静かに電話を切った。そして、目の前にあるパソコンの画面に表示された、地元のニュースを再度眺める。
またこくりの市内で、行方不明者が二人、増えていた。

＊

実は伊吹は、すぅくんに導かれてあの大鬼を目撃したその日の晩、道成寺刑事に電話を掛けていた。話しにくい部分を適度にぼかしながらも、必要にして十分な情報は伝えた。隠野の山に潜んでいる大鬼が、町へ下ってきて、人を喰らっている可能性がある。
しかし、道成寺刑事は答えた。
『ありがとう。わたしも出来る限り、なんとか上に伝えてみるね。助かる。でもね……その可能性はある程度、こっちでも考慮してるみたいなんだよね。それなりに探索の手は広げているって、上司からも聴いたし……ただ、どうしたって限界があるの。表だって大捜索は出来ない。大きな化け物を探している、なんて話を打ち明けられる捜査員も限られてる。実はそれなりに、マスコミも、こくりので起きてる異常事態に勘づいててね。週刊誌とかのライターらしい人がうろうろしてるんだ。下手に動きすぎると、情報が漏れてしまうかも知れない。その辺で板挟みになって、効果的な活動が出来てないようなの。わたしとしては、忸怩たるものがあるんだけど……下っ端の哀しみだよね。あんまり手が出せない。ごめんね』
謝る彼女に、伊吹は感謝の言葉を伝えて、電話を切った。仕方ないことだろう。あまりに非現実的な話なのだから。
しかしそれなら――。
伊吹自らすぅくんを伴って、あの大鬼を倒しに行くべきだろうか。
それも幾度か考えた。鬼を封じた人間の子孫として、そして鬼を解放してしまった責任ある者として、やるべきことなのかも知れない。すぅくん自身は同じ鬼として、あの人食い鬼のことをどう考えているかは分からな

かったが、それでも伊吹が頼み、連れて行けば、きっとまた戦ってくれることだろう。そこまでは、考えが進む。

だが。

それ以上は、伊吹としても動けなかった。自分が怖い、ということはもちろんある。でもそんなことより、すぅくんを自ら差し向けて戦わせる、ということに、気が進まなかった。以前あの一つ目の鬼と戦ったときにも、すぅくんは身体中に深傷(ふかで)を負っていた。翌日にはほとんど治っていたとはいえ、危険な状態になることに違いはない。ましてあんな大きくなった後の鬼と一戦交えれば、すぅくん、いやスクナ様であっても、勝てるとは限らないだろう。そこへすぅくんを送り込む気は、正直言って起きなかった。

身勝手な理由かも知れない。けれど、無数の他人の不幸よりも身近な一人の苦痛の方が大きく感じられるものである。未だに、伊吹は大鬼への対処へ、踏み出すことが出来ずにいた。

＊

一方で、連続殺人事件の方はあの海辺での事件以来、被害が途絶えていた。とはいうものの、死者や行方不明者が多発している状況であることに変わりはなく、夏祭りを本当に開催するかどうかも危ぶまれたらしい。市役所内でも議論が紛糾した、という話を、紺が父親経由で仕入れてきていた。確かに身の安全を確保するのも難しく、万一のことがあったとき、責任の取りようがない。普通なら、開催を見送るところだろう。

しかしながら、一部で「こういうときだからこそ開催するべきである」という意見も聞かれたらしい。厄を祓う意味でも、祭りを盛大に執り行うべきだ、という話だった。そして結果的に、こちらの意見の方が通ったのだった。電話口で紺は、訳知り声で話していた。

『うちらとしては微妙なところやけどなー。事件に巻き込まれてる、けど祭りには行きたい。板挟みや。でも現実問題として、祭りをやろうがやるまいが事件が続いてるんは変わりないわけやし。せやったらいっぺん盛大に町を盛り上げて、犯人のやる気も削いだったらええんちゃうか、みたいな話らしいわ。脳天気な話やなー。ははは』

「紺にだけは言われたくないと思うぞ」
ともあれ、警備の警察官を大幅増員し、万全の準備を整えた上で、祭りの開催は決定したようだった。祭りの日の七日が近付くにつれ、こくりの町は次第に浮き足立ち、お囃子の練習が聞こえたり、提灯ぼんぼりが下がるようになったりしていった。前日の六日には、山から海へ向けて盛大に御輿が下り、町の人々の、翌日への気持ちを駆り立てる。海沿いはことさら華やかに飾り立てられていて、盆踊りのための櫓も、すでに組まれていた。
結局メールでの話し合いの結果、祭りへは伊吹たちの他にも紅葉、みわやほたる、さらに安全のため、保護者の匠雄や紀乃まで連れ立って、大所帯で行くことになった。もちろんすぅくんも連れて行く。当日の夕方五時に、例の窟戸神社前に集合する、と決まった。
そして――。
一通りのやりとりが終わった後。
吉野から一通だけ、簡単な文面のメールが届いた。
『祭りの後に、話したいことがある。いいかな』
伊吹は悩んでいた諸々のことも忘れかねないほど、そわそわし出した。

3.

「伊吹。ちょっと」
家の廊下でそんな声に呼び止められたのは祭りの当日、三時頃のことだった。
振り返ると声の主は、祖母の翠だった。綺麗な白髪に痩せ型の祖母は、六十を過ぎた今でも十分に美しい。
そろそろ浴衣に着替えようかと思っていた伊吹は、珍しく祖母から話しかけられて、きょとんとした。
「どうしたのだ？」
「曾婆ちゃんが、伊吹に話があるて呼んでるわ」
祖母は淡々と話す。伊吹は眉を顰めた。
「今でないといけないのか？　これからちょっと……」

「大事な話やて言うてるわ。そんな長くはかからんやろから、ちゃんと聴いたり」
祖母の言葉にはいつも、有無を言わさぬ力がある。正直伊吹は、祭りのこと、それから祭りの後のことで頭がいっぱいだったのだが、こうなっては仕方がない。祖母と共に、曾祖母の暮らす別棟へ、向かうことにした。
廊下を歩きながら、伊吹は祖母に尋ねる。
「どうして祐理名さんではなくて、おばあちゃんが呼びに来たのだ？」
「さあな。大事な話やからと違うか。曾婆ちゃんの考えは、おばあちゃんには分からんわ」
祖母はこちらも見ずに素っ気なく返す。とはいえ、伊吹はこの祖母に前々から親しみを覚えていた。たぶん、自分の中の冷めた部分は、この祖母から受け継いだものと感じるからだろう。
玄関を過ぎて、表に出る。曾祖母が住んでいるのは、寺の中でも特に奥まったところにある、庵のようなこぢんまりとした建物である。何でも元は、曾祖父が書斎のようにして一人で過ごすために作った場所らしかった。そこを改装して、生活できるようにしている。ここに普段は一人でいて、食事時など用があるときは、祐理名さんが出入りしていた。もう九十を過ぎて危ないから、一緒に住むように、と三弥和尚や匠雄和尚は説得していたのだが、曾祖母が聞き入れるはずもない。山の木々の陰になる離れで、今も曾祖母は、静かに日々を暮らしていた。
「あんた最近、勉強もせんと友だちとばっかり遊び歩いとるな」
「……え？」
離れまで行く途中の庭で、不意を突いて祖母が話しかけてきた。
「なんや、男の子とも仲良うしとるみたいやしな」
「だ、誰がそんな……ああ。みわか」
伊吹は肩を落とした。後で成敗してやろう、と心の中で誓う。そんな伊吹を見て、祖母は眼を細めた。
「そない気にすることないやないの。年頃の女の子なんやから、色恋沙汰がない方がよっぽど心配やわ。おばあちゃんもあんたぐらいの頃は、よう遊んだもんやしな」
「お、おばあちゃんがか？」

伊吹は怪訝な表情をした。祖母が遊んでいるところなど、火星人の来訪ぐらいあり得ないことのように思えた。すると祖母は肩をすくめた。
「どんな人にも若い頃はあるんや。長いこと生きると、若い子らには想像できんぐらい、色んなことを見聞きする。おばあちゃんが若い頃は……大人に反抗して奔放な、はぐれた生き方をするのが流行ったもんやからな。私自身はそんな無茶はせえへんだけども。大学の頃は喫茶店行ったり、映画観に行ったりしたもんや。あんた、サルトルは読んだか？」
「……いや」
伊吹は首を振った。すると、それぐらいは教養として読んどきなさい、アメリカへ行ってから恥をかくに、と祖母は特段感情を込めずに言う。そんな祖母の姿を見ながら、伊吹は少々困惑していた。
祖母といえば、硬い顔をして家計簿を見たり、祖父や他の家族を静かに叱ったりするところしか、見たことがなかった。話といえば、落ち着いた真面目なことばかりである。雑談など、聞いたこともなかったのだ。面白い物事とは無縁で、石像のように硬直した人生を送ってきたのではないか、と内心では思っていた。
そんな祖母の口から、かつてのはやりや若者向けの娯楽のことを聞かされると、何だかひどく居心地が悪く感じられる。祖母にも若い頃があり、学び、笑い、生き生きとした人生を送ったことがあるのだ。当然のことなのだが、想像すると不可思議なように思える。
少しの間、祖母はまた口を噤んで歩く。伊吹も黙って続いた。
そして、あと少しで曾祖母の離れに着く、というところに来てから、伊吹の方をちらりと見た祖母は、また言った。
「ほんなら……映画の『卒業』は観たことあるか？　ダスティン・ホフマンの」
「……誰だ？　監督か」
「俳優や。なんやあんた、自分の専門以外は何にも知らんのかな。少しは興味に幅を持たせなさい。滋養を身体に入れんと、頭も心も育たんようになるに。男を見る目も、ええ男を見て養っとかなな、そのうち痛い眼を見る」
グレゴリー・ペック、ロバート・レッドフォード、ポール・ニューマン、

アラン・ドロン、三船敏郎、聞いたことぐらいあるやろ、と祖母が言うので、一人も知らん、と伊吹は正直に応えた。どうやら祖母は、相当な映画ファンだった頃があるらしい。

離れの玄関口の前で、祖母は深々とため息を吐いた。

「情けない。しょうもない男に引っかからんように、小説や映画で勉強しとき」

「はあ……」

伊吹はどう応じてよいか分からず、そんな声を漏らした。古びた和風建築である離れにはちょっとした庭も付いていて、表に松や椿が植わっていた。

離れの引き戸に手を掛けながら、最後に伊吹は、祖母に尋ねた。

「その……どうしていきなりそんな話をしてくれたのだ？　今まで、雑談など一度もしたことがないのに」

すると、祖母はいつもと変わらない淡々とした表情で、あっさりと答えた。

「伊吹も少しは大人になったようやからな。そういう話も、したらなあかんと思ってな」

そうして、祖母は伊吹を残すと、母屋へすたすたと足早に戻っていった。

4.

曾祖母の離れに上がると、すぐに薄暗く、短い廊下がある。伊吹は、軋むそこをそっと歩いて、曾祖母がいるはずの、右側の居間の襖を開いた。

「……伊吹か」

中では、曾祖母のあさ香が、縁側に向かって座っていた。すっかり小さくなった曾祖母はゆっくりと振り返ると、伊吹に、ほなそこへ座りなさい、と手前の座布団を勧めた。

伊吹は言われたとおり、そこに正座する。居間は以前一度来たときと変わらず、座卓と座布団があるだけだった。部屋の隅の小さな棚には、曾祖父の遺影と、位牌が立てて置いてある。

こちらへ向き直った曾祖母は、しばらくの間、伊吹の顔を見つめていた。

「……整った顔やこと。よう、似とるわ」
「？　誰にだ？」
伊吹は尋ねるが、曾祖母は答えない。また少しの間、時間が空く。
「伊吹。あの子は、どないした」
「あの子？……ああ、すぅくんか。あの子は母屋で、紅葉に浴衣へ着替えさせられているはずだ。これから祭りへ行くのだ。その……話は長くなるのか？」
伊吹は遠慮なくそう訊く。しかしそれでも、曾祖母はこれといった反応を見せなかった。
「……あの子のこと、もう、あんたも分かっとるな」
「え……」
唐突にそう言われ、伊吹は返す言葉を思いつかなかった。
曾祖母は何ということもないかのように、ただ伊吹を見据えている。白く薄くなった髪、皺の寄った頬、眼は垂れてはいたが、未だに眼光は鋭いままだった。曾祖母は、粛々と話す。
「あの子は人間やない。鬼の子や。鬼が人になったんか、生まれかわったんか……それは知らん。せやけどな、あの子は、鬼神（おにがみ）様の子や。分かるな」
「……あ、ああ」
伊吹は何とか、そう答えた。
曾祖母は半ば目を瞑りながら、話を続ける。
「ここいらにはな、よーけ、鬼の話がある。伊吹もよう知っとるな。昔っから、この隠野は、鬼の棲まう里や。鬼に護られたこともある、鬼に殺されたこともある。人が鬼になったこともある。色んなことがあった。鬼と共に生きる土地や。その度に、うちの寺は色んなことをしてきた。鬼を退治し、鬼を味方に付け、あるときは、鬼を人から護ったこともあった。窟戸の神社さんとも、力を合わせてな。この土地のために、ずっと、鬼を奉（まつ）ってきた。ほんで、何遍も、鬼に会うたこともある。この、おばあちゃんもな、若い頃はよう、見たことがあった」
「え！」
伊吹が声を上げると、曾祖母は嬉しそうに笑ってみせた。
「昔は今よりも、山がようけあってな、明かりも少なかったからな。どこ

行っても暗がりがあって、そういうところには、人でも動物でもないもんが、ようおったもんや。おばあちゃんは、よう見た。お化けもよう見た。近所の人から、助けてくれー言うて、泣きつかれて、お祓いしたったこともあった。ほん中に、鬼もおった、ていうだけのことや。鬼言うてもな、昔のご先祖様に、みんながみんな封印されたわけやない。人里のそばに、こっそり生きとる鬼もおって、時々人の子どもの遊ぶ中に、紛れ込んだりもしとったもんや。昔はおおらかやったから、見知らぬ子がおっても、誰も気にせんだからなあ」

窓の外から蝉の鳴き声が染み入ってくる。けれど、曾祖母の声は、不思議とはっきりと聞こえた。これほど長い時間、曾祖母が語っているのを初めて聞いた伊吹は、真剣に向き合っていた。

「せやけどな、段々時代が下ってきて、鬼の居場所がなくなっていったとき。鬼らは自分から、山へ去っていったんや。大昔のお社のある、隠野の山へな。それが人のためでもあり、鬼のためでもあったんや。人が封じるまでもない。段々、おばあちゃんも、鬼を見いひんようになった」

それがな、近頃になって、ぐっと変わった、とおばあちゃんは眼を見開いた。

「鬼がおる気配がする。そこらに鬼がおるのが、寺から出んでも、おばあちゃんにもよう分かる。なんでやろか、ておばあちゃんも、不思議に思たんやけどな。この何ヶ月か、何かが変わったようや。ほしたら、そこへ……あんたが、あの子を連れてきた」

「……」

「顔を見んでも、雰囲気振る舞いだけで、すぐに分かった。あの子は人やない、鬼や、てすぐに分かった。頭を撫でたら、角もあるしな。せやけど何でか、あの子は、人の気配も身にまとっとった。鬼が人に、生まれ変わったようや。あんな子は、おばあちゃんは初めて見た。初めて見たけどな、でも、この子はうちで育てなあかん、と、こうも思った。鬼のことは何でも、うちがきちんとしたらなあかん。ちゃんと責を負うて、やっていったらなあかんと思たんや。せやから、うちで引き取ることにした。なあ、伊吹。あの子は、あんたが連れてきたんやな」

曾祖母は伊吹の顔を、じっと覗き込む。

断罪されている気分になっていた伊吹は、何とか頷いた。
「ほんなら……どこから連れてきた。何があった？　何があって、あの神様は、人になった。ほんでこれから、どうするつもりや。答えなさい」
しわがれていながらも、力のある声で曾祖母は尋ねた。
もちろん、答えずに済ませるわけにはいかない。そんなことは伊吹も分かっていたが、しかし、伊吹自身も、どう答えてよいのか、まるで分からなかった。
何とか口を開くと、短くこう話した。
「分からない。何も分からないのだ。あの日、列車は巨大な蜘蛛のような化け物に襲われた。あれも鬼なのだと思う。私はそいつらによって、ひどい怪我を負わされた。そしてあの山奥に谷に連れて行かれ……そこですぅく、いや、鬼の神様に会った気がする。はっきりとは覚えていない。大きな顔に覗き込まれたことだけ、漠然と憶えている。それから気がついたら怪我が治っていて、すでに私のそばには、今と同じ姿になったすぅくんが横たわっていた。何が起きて人になったかは、私には分からない。これからどうするべきなのかも……分からない」
伊吹の話はそれだけで終わる。
曾祖母は小声で、ふん、大怪我な、と呟いていたように聞こえた。それがどういう意味なのかは、伊吹にも分からない。ひょっとしたら曾祖母なりの解答を思いついていたのかも知れないが、曾祖母はあいにく、教えてはくれなかった。
曾祖母は、鋭くこう質問する。
「蜘蛛のお化けみたいな鬼に襲われたんやな。ほんなら……それは何でや」
「え……」
「何の理由もなしに襲われたんか。ほんなことないやろ。なんか理由があるんと違うか。言うてみ。鬼に襲われる理由。何かしたんか。なんでこのところ、またこんなに鬼がようけ人前に出るようになったんや。そういう時代になった、ていうだけか。違うやろ」
なんか、思い当たることはあるか、と曾祖母は問うた。
しかし伊吹は、何も答えなかった。
脳裏には――ぱっくりと開いた、社の黒い口が浮かんでいる。

原因はもう、とっくに分かっていた。あの社を開けたのが、私だからだ。どうにかしてあの蜘蛛のような鬼も、大きな眼をした鬼も、それを嗅ぎつけて伊吹の元へとやって来たに違いない。けれど、曾祖母にそれを伝える気にはなれなかった。申し訳ない気持ちでいっぱいだったからだ。

せっかく昔から、曾祖母が、あるいはそのさらに前の先祖が、護っていてくれたはずのこの町を、自分は腹立ち紛れに社を開けて、台無しにしてしまった。それによって、大勢の人がすでに亡くなってしまった。人食い鬼の餌食になってしまったのだ。取り返しが付かない。どうすることも出来ない。

だから、言い訳は出来ない。

そう思っていた。

「……言いたないんやったらな、ええわ」

曾祖母はまた、ゆるりと口を開く。

「せやけどな、人はな、生きてる間にやったことには、みんな責任を持たなあかん。落ち込むことはない。悩むこともない。苦しまんでもええ。せやけどな、責任だけは持って、生きていかなあかん。目をそらしたり、逃げ出したりしたらな、それは、生きてないのと同じや。自分の過ごしてきた、生きてきた時間を背負って、ほんでやっと初めて、生きてる、ということになるんや。分かるか」

卒寿を越えてなお矍鑠としている曾祖母は、そう穏やかに説いた。

伊吹は、頷いた。

曾祖母はすでにうすうす、勘づいているのだろうな、と思った。

また少し、時間が過ぎる。

「その……」

今度は伊吹から、話し始めた。

「あの子は、すぅくんは……何とかして元に戻してやった方がよいのだろうか」

「ん？」

「いや、その……何がきっかけでああなったのか、私には分からない。分からないのだが……しかし元が人間でないことは、間違いないと思う。本来神様なのだとしたら……戻してやった方がよいのではないか。もし、ひ

いばあちゃんがどうしたらよいのか知っているなら、教えて欲しいのだ。あの子がこのまま人間であってよいとは、私には思えない。たぶんその責任は、私にある。出来ることなら一刻も早く元の姿に戻してやった方が、よいと思うのだ……」

「あの子がそう、自分で言うたんか？」

すると曾祖母は、掠れた声で尋ねた。

「……いや」

「ほなら、ええやないか」

「しかし……」

「あのなあ、伊吹。元へ戻す、元へ戻すて言うけどもな、ほんな簡単に、元の姿に戻るもんなんて、この世にあるんか？　伊吹は学があるやろ。言うてみぃ」

「……そう、だな。一度変化した状態を完全に元に戻すのは、理屈の上では出来るが、実際には、すでに変化の影響を被っている。厳密に言えば、変化前とは違うものだ」

「そうやそうや。元と寸分たがわずおんなじもんなんてな、出来へん。元を真似たもんならじきに出来るやろけどな、同じもんにはならへん。それはもう、別のもんや。あの子も、そうと違うか。今、元に戻そとしても、現れるのは、別の姿と違うか」

伊吹ははっとする。

あの一つ目の鬼を追った夜、すぅくんが成ったあの姿。伊吹とそう年格好の変わらない、少年のような、鬼の姿。

四つの鋭利な眼差しを、思い出す。

「もし、あの子が自分で、元通りの鬼に戻りたて泣いてるんやったら、ほんなら一所懸命、やり方を探したったらええ。せやけどな、そうやないんやったら、無理して戻さんでも、ええんと違うか。あの子は賢いに。賢い眼をしとる。戻らなあかん時には、自分でなんとかするやろ。それにな」

曾祖母は続ける。

「いっぺん変わってしまったもんにはな、変わったなりの理由があるもんや。森や、山や、町なんかもそうやろ。おばあちゃんの若い頃とはもう何もかも、別のもんや。そんなんを無理して昔に直そと思てもな、ええこと

なんかなんもあらへん。百害あって、一利なしや。伊吹は、自分のせいであの子がああなってしもた、て思てるかも知れんけどな、そうやって変わったんも、自然の流れの一つに過ぎひんな」

伊吹は俯いていた。

「前の方がよかった、元の方が、ホンマの姿やった。ようほんなん言うけどな、自然の理を、疎かにしたらあかん。あんたが思てるよりずっと、世の流れいうんは賢いもんや。うちらがこの世を動かしとるんやない、うちらがこの世に、生かされとるんやからな。変わったもんには、理由がある。あの子が鬼から人になって、あんたの元へ来たんも、阿弥陀様のお導きやろ。元に戻したらええいうもんやない。あの子は、あんたのもんや。あの子を、大事にしたりなさい」

伊吹は、俯いた。

そして、そっと頷いた。

縁側の外、遠く町の方角から、笛や太鼓の鳴る微かな音が響いてくる。

「……あんた、祭りはええんか？」

「あ！」

慌てて伊吹は部屋の時計を見る。もう四時に近いというのに、何の支度もしていない。

「す、すまないひいばあちゃん。もう私は行く！」

「ああ、行っておいな」

わずかに口元に笑みを浮かべて、曾祖母は首肯した。立ち上がりがてら、伊吹は言う。

「その……色々話してくれて、ありがとう」

「気ぃ付けてな」

曾祖母は、眼を細めた。

伊吹は急いで部屋を出ると、玄関を出て、母屋へ向けて駆け出した。

5.

紅葉に謝りながら浴衣を着付けてもらった伊吹は、髪をきちんと解き、小さな巾着も借りて、持ち物を入れる。普段はろくに身なりなど気にしな

い伊吹だが、慣れない作業を改めてしてみると、あっという間に三十分以上が過ぎてしまった。それから、紅葉に気づかれないようこっそりと、あのネックレスを付けると、浴衣の内側に入れ込んだ。

伊吹が家を飛び出したときには、もう全員が表に揃っていた。紅葉、すぅくん、みわ、ほたるは、とっくに用意を終えている。すぅくんは、数日前に買ってもらった新品の男の子用の浴衣を着て、嬉しそうにしていた。今日も首からは、あの假面を下げていた。

「あぁん。用意出来たのかデコッパチ。んじゃ、行くぞ」

坊主頭、というよりスキンヘッドで強面の匠雄和尚だが、さすがに浴衣姿は粋でよく似合っていた。もう一人の付き添いである紀乃は、今日も眠たそうな顔をして、気のないよれよれのTシャツ姿でいる。ようやく一同は、町へ向けて出発した。

町は、年に一度の活気に満ちている。海岸沿いへ向かって、町中の家々から人が歩いていた。幼稚園児から老人まで、幅は広い。普段は見かけない顔の子どもたちは、夏休みで帰省してきたのだろうか。大人の数も少なくない。開催前は、事件や事故が多発しているため、客数が危ぶまれていたものだが、いざ蓋を開けてみると、想像以上の人手だった。役所の話にも出てきたように、厄払いの気持ちもどこか働いているのかも知れない。

みわとほたるは、それぞれ中学校、小学校の友人を見つけて、一緒に歩いていた。紅葉も、元同級生や近所のおじさんおばさんなど、あちこちからよく声を掛けられている。毎日のように町に出て買い物をしたりしているので、見知った顔が多いのだろう。一方で伊吹は、こうした場になると未だにまだまだ知り合いが少ない。親しい友だちも、高校でもあの三人ぐらいのものだった。当然である。夏休み前は、意識して極力友達を作らないようにしていたのだから。

――この数週間で、自分はずいぶん変わった。

伊吹はそう思った。

自分の意識や考え方に、大きな影響のある出来事がいくつも起きた。その度に頭を抱え、落ち込んでいたけれど、少しずつ、確実に考え方や生き方が、変わっていったような気がした。頑なだった思考方法も、多少は柔らかくなったように思う。

そして自分として、何よりも大きく変化した、と感じていたのは――人間に興味が出てきたこと、だろうか。

前までは、伊吹は人間にほとんど関心がなかった。少なくとも、自分ではそう思っていた。小学校、中学校と東京やサンフランシスコで暮らしているとき、興味の中心は、数学や物理学から微動だにしなかった。人間を見たくなかった、関わり合いになりたくなかったのだ。その原因は、父親かも知れない。人間のろくでもないところ、薄汚いところばかりを見せつけてくる、あの父親。そのせいで、人間という存在そのものに、希望を抱けなかったのかも知れない。そしてほんのひと月ほど前まで、そうした考えは変わらなかったのだ。

けれど。

この町、この隠野（こくりの）という土地の独特の雰囲気は、強力だった。東京のような都会でのソリッドな生き方は、ここでは通用しないのだ。あらゆる意味で渾沌とした生が、遙か昔から充ち満ちているこの町では、伊吹でさえも人間に目を向けざるを得なかった。

さらに土地の性質だけでなく、あの鬼たちも、あの殺人事件も、いやがおうにも人間へ注視させてくる。鬼という人ならぬものを目の当たりにすることで、逆に人間について考えざるを得なくなった。残虐で理解不能な猟奇殺人が身近で頻発することで、人って一体何なのだろう、と思わずにはいられなくなった。

そして何よりも――すぅくんだった。

ほんの数週前まで、あの子と出会ってすらいなかった、ということが、今となっては不思議で仕方なかった。考えてみると、何よりも伊吹の気持ちを変えたのは、すぅくんなのかも知れない。朝から晩までずっとこの子と過ごし、どこへ行くにもほとんど一緒だった。この子が無邪気に笑い、喜び、遊ぶ姿を、ずっと身近で眼にしてきた。同時に、恐ろしい鬼の姿になって戦う様も。

そんな全てが、伊吹にはこれまで一度も味わったことのない経験だった。それは伊吹の心に少しずつ作用し、揺さぶり動かし、根本から物の考え方、捉え方を変えていった。伊吹自身、長く自覚していなかったけれど、改めて思い返してみれば、それは明らかなことだった。

今、すぅくんは、紅葉と手を繋いでいる。
その後ろ姿を、伊吹はさっきから見ている。
もう一度、その小さな手を取って、共に歩きたくなった。
伊吹はそっと近付き、背後から手を伸ばす。
楓の葉のように愛らしく暖かい、あの掌を触りたくなる。
「お、伊吹」
その時、声を掛けられた。
ちょうど伊吹たちは、約束の窟戸神社前にたどり着いたところだった。大きな黒い鳥居の正面である。声の主は当然、吉野だった。彼の傍らには、紺と澄哉が一緒になって待っていた。
伊吹は伸ばし掛けた手を戻すと、三人に向かって、その手を挙げてみせた。

6.

「なあ吉野。いつからいぶちゃんのこと、名前で呼ぶようになってんや？」
「へ？　まーいいじゃん。な、澄哉」
「ああ、うん……いいと思うよ。仲良くなれたなら」
海岸沿いへ向かう間も、三人は相変わらずの会話を交わしている。澄哉は浴衣姿、紺と吉野はTシャツに短パンだった。澄哉はまたしても、一見すると女の子に見えるくらい、淡い色合いの愛らしい布地を選んでいる。吉野はともかくとして、多少は着飾ってくるだろうと思っていた紺が、いつもとまるで変わらない味気ない服装で来たのは、伊吹は意外だった。
「意外はこっちやって、いぶちゃん。あんたがほんな、かーいらしい浴衣姿で来るなんて思わへんだわ。どしたん？……まさかまさか、ひょっとして、吉野が名前で呼ぶようになったんと関係があったりなかったり？　んー？」
「なかったりだ。これはうちの母親が送ってきたものだから、紅葉とおそろいなのだ」
素っ気なく伊吹はそう答えた。実際、その通りではあった。具合のよいことにちょうど一昨日、母親が東京の百貨店から、ギフトで贈ってくれた

のである。色合いは、紅葉は赤系、伊吹は青系で、デザインは同じだった。どうやら高級品らしく、肌触りもよい。

「ふぅぅぅん。まーええけど……もし万が一、二人の間になんかあったら、親友であるところのこの紺ちゃんには知らせてな。約束やで。オンナの約束」

「ああ、分かった」

耳元で囁いてくる紺に、はいはいとぞんざいに伊吹は頷いた。

そして伊吹たちは、海岸通りの露店街へと到着する。普段は海水浴客の車が停まっているぐらいの物寂しい道筋に、今は無数の夜店が並び、提灯が下がり、すっかり祭りの雰囲気が漂っていた。人出は多くざわついており、こくりのの町中の人々が皆、集まってきたかのようである。そろそろ日も沈み始めて、夏の夕暮れらしい蒸し暑い空気が、辺りに立ち籠めていた。まだまだ蝉の鳴き声がやかましい。

浜辺の方へ目を向けると、高い木の櫓が建てられていて、その上には和太鼓が据えられていた。まだ叩かれてはいない。土台には紅白幕や電飾が巻き付けられており、その周囲で町内のおじさんたちが、何かごそごそと準備をしていた。盆踊りが始まるのは、日が沈みきってからである。

もう少し離れた別の場所には、小さな野外ステージが作られていて、有志のバンドが簡単な曲を演奏し、雰囲気を盛り上げていた。これら一通りのスケジュールが済んだ後には、海から打ち上げ花火が上がる予定である。まさに全市を上げた、一大イベントだった。

立ち止まった匠雄和尚が、伊吹たちへ向き直ると口を開いた。

「んじゃあガキども。拙僧と、このおばさんはここらで適当にぐだぐだやってるからな。携帯もあるし、何かあった場合は即刻連絡するように。ヤンキーに絡まれたとかそういうときは、俺が法力を駆使してやっつける。諸共いいな」

はーいという気のない声がまばらに上がる。ふと気づくと、匠雄も紀乃も片手にビール缶をしっかりと持っていた。いつの間に手に入れたのか知れない。紺が伊吹にまた囁く。

「法力と違て単に陰に連れ込んでボコボコにするだけでは」

「何か言ったか日焼けお嬢。そんだけ焼いても全然ギャルに見えねえな」

凄みのある声で、匠雄はすぐさまそう言った。確かに真っ黒に焼けた紺は、ギャルというよりはやはり、少年めいて見える。口を尖らせて抗議しようとする紺を強引に引っ張ると、伊吹たちは匠雄たちから離れ、祭りのさなかへと繰り出していった。

すぅくんを連れた紅葉は、紺や澄哉と嬉しそうに会話している。みわとほたるは、りんご飴や綿飴、カステラ、金魚すくいにくじ引きといった、きらびやかな露店を眺めるのに忙しい様子だった。頃合いを見計らって、そんな他の連中に気取られないよう、伊吹はそっと吉野のそばへ近付いていく。そして喧噪に紛れて、彼にこっそりと尋ねた。

「なあ。その肩掛けは何だ？」

吉野はなぜか、祭りに似つかわしくない大振りな肩掛け鞄を持ってきていた。普段はこんなものを持ち歩いたりはしていない。すると吉野は、悪戯っぽい表情で答えた。

「後で教える。それより伊吹、浴衣似合ってるな。意外と」

「い、意外とは何だ！　せっかく着て来てやったのに……」

「来てやった？　何、俺のために着てくれたの？」

「はぁあ？　そんなこと誰が言った！　自惚れるな」

伊吹は目をそらす。また顔が熱を持っている。

実のところ、母親から贈られてきた浴衣には「男の子に見せてあげましょう」というお節介なメッセージが付けられていたし、手間を掛けて着ようという気になったのも、吉野が来ると分かっていたからだったのだが、そんなこと、まだ言うわけにはいかない。

――そうだ。

伊吹としても今日は、やるべきことがあった。

すっかりうやむやになってしまっていた、吉野の告白への返事。

もうそろそろ、言わなければならないだろう。

答えはすでに、決めてあった。

ただ、それを言うだけの勇気が自分にあるかどうかは――その時にならないと、分からなかった。

「……やっぱすげーよなー」

「へぇあ!?　な、何がだ!?」

唐突に吉野に話しかけられて、伊吹は露骨に動揺してしまう。しかし吉野はそんな伊吹のリアクションをまるで気にしていない様子で、周囲の雑然とした人混みを眺めていた。

「警官だよ警官。もうさっきから、何人もすれ違ってるぜ」

「え？」

言われて伊吹は、改めて周囲を見廻す。見ると、あちらにもこちらにも制服警官が立っていて、外見上はにこやかな表情で、祭りを見守っていた。いくら人出が多いとはいえ、普通の人数ではない。言うまでもなく、あの連続殺人、そして、行方不明事件に対する防衛策なのだろう。

警察側が行方不明事件の真相について、どこまで掴んでいるかは分からない。以前の道成寺刑事の言葉からすれば、表立てられている以上に、本当の原因について、彼らは把握しているのかも知れない。鬼に喰われて人がいなくなっているのなら、警官が何十人いたところでさしたる意味はないようにも思える。とはいえ、ポーズとしては大切なのだろう。客の安堵にも繋がる。

それになにより、あの猟奇連続殺人事件は、絶対に阻止しなければならない。

このところ、あの事件の次の被害は起きていないようだった。元々月に一、二回程度のペースの事件なので、そこまでぽんぽんと連続して起きたことは、これまではない。しかし、これからどうなるかは、誰にも分からないことである。通常なら、こんな危険な状況で、こんな大きな祭りを開催すること自体があり得ないので、このレベルの警戒を行うのは、至極当然のことと思えた。

そう意識してみると、辺りには思いのほか、物々しい雰囲気が漂っていた。

「おやぁ。これは、仲良し夫婦かな？」

そこで、そんな珍妙な台詞が聞こえて伊吹が振り向くと、立っていたのはタイミングのよいことに、あの道成寺刑事だった。ふふん、と嬉しそうに笑みを浮かべている。

「な、だ、だ、誰が夫婦……」

「刑事さん。何してるんですかこんなところで」

動揺する伊吹を横にして、吉野が変な顔をした。刑事は平気で答えた。
「何って、もちろん警邏じゃない。仕事仕事。事件はまだ終わってなんかいないんだからね～」
「仕事……？」
伊吹は呟いて、彼女の全身像を見る。紺色と白の小洒落た浴衣、髪は綺麗に結い上げ、白いうなじが見え隠れしている。片手には団扇、片手には巾着。おまけに頬がほんのり赤く、女の伊吹から見ても色っぽかった。
疑わしげに伊吹は問う。
「酔っていないか……」
「まっさかー。勤務中だよ～。そんなわけないじゃない。あ、お連れの皆さんも、こんばんわ。道成寺恵と言います。安達さんと頭鬼くんはお久しぶり」
続いて彼女は、紺や澄哉、紅葉、みわたちにも挨拶をした。全員ぽーっとした顔で、色気全開の刑事を見つめている。彼女はパタパタと手を横に振った。
「やだなあ。そんな熱い視線で見られても。お姉さん照れちゃうよ。ははは。みんなもね、例の殺人事件はまだ解決していないから、人混みには気を付けてね。どんな身近に、にっくき凶悪な殺人鬼が潜んでいるか、分かったものじゃないんだから」
道成寺刑事は余裕の笑みを浮かべて言っているが、しかしその言葉にはどこか、真摯な響きも混じっていた。そんな力に押され、伊吹たちは思わず、素直に頷く。
「にっくき凶悪な殺人鬼、か……」
吉野がそう小声で言う。
聞きつけた刑事は、問い返した。
「ん？　どうかした？」
「いや……一体それって、どんな人なんだろうな、ってちょっと思ったんです。言葉面だけ聴くと、もう鎌でも持ち歩いて目を血走らせて歩いてるような、一目で分かるヤバイ人みたいですよね」
「あはは、そうだねー」
道成寺刑事はけらけらと笑う。彼女はスタイルもよく美人なので、人混

みの中でもよく目立っていた。通りすがりの男たちは、大半が彼女をちらちらと眺めていく。彼女は話を続けた。

「でもね。尾津野さんにはだいぶ前、事情聴取の時に話したと思うけど……にっくき凶悪な殺人鬼って、大体普通の人だよ。どうってことない、ただの人。やることはそれこそ、人とも思えない許し難い振る舞いばかりなんだけど、それ以外は、あっけないぐらい普通。宇治川さんが前に話してたような、中世の凄まじい生き様をした鬼、鬼になった人、みたいな犯人なんて、わたしは知らないなー」

ところで宇治川さんって陰があるけど割とイケメンだよね、わたし立候補してみようかな、などと、にやにや笑顔で刑事は言った。伊吹も吉野も黙っていた。

「まあ、それはともかく。『世の中のルールに縛られすぎて、本来的な生き方が出来なくなった人が、限界まで耐えに耐えて苦しみ抜いた挙げ句に、人間本来の鬼のような姿になる』だったっけ？　イケメンの言葉とはいえ、そこは同意できないな、わたし。今の世の中ルールは多いし、確かに厭なことも多いけどさ、中世の社会で生きていた人たちと同じようには扱えないよ、やっぱり。どうにかしようと思えば、どうにか出来ることばかりだとわたしは思うよ。そうじゃない？　昔の人みたいに、社会全体で決められた生き方に従わないといけないわけじゃないし。本気になれば、今はどうとだって生きられるはずだよ。だからさ……今の時代は、昔みたいなホントの鬼、恐怖を体現する殺人『鬼』なんて、現れないんじゃないか、っていうのが、わたしの考え。現実に出てくるのは、そんな昔の鬼たちに憧れた凡人による、劣化コピーだけ。そう思うよ」

あの後しばらく考えてみた結果の、わたしなりの結論でした、と言って、道成寺刑事は肩をすくめた。

マジメな話で正直拍子抜けしたが、でも伊吹は、よく理解できた。鬼なんて、そうそう簡単になれるものではない。今回の連続殺人も、そんな絶望感を味わう種類の犯行とは違っていた。虚無的な雰囲気の漂う現場であり、切実で濃厚な生を生きる『鬼』の犯行とは思えない。

伊吹が出会ってきた、あの本物の鬼たちのことを思い出しても分かる。本当の鬼がする振る舞いは、あんないかにもな、シリアルキラーの犯行現

場をなぞったような、冷徹な行為ではないのだ。
すぅくんは――蜘蛛のような鬼を握り拳の一撃で叩き潰し、一つ目の鬼の眼を素手で引き裂いて殺し、そして伊吹に、情欲と共に襲いかかった。
そこには、虚無の立ち入る余地などない。
滾り迸る生気、欲動から蠢く命、それしかなかった。
人食いのあの大鬼も、おそらく同種であろう。
「そうですか？」
するとふいに、伊吹の隣で吉野が、そんな言葉を吐いた。
「そんなに自由ですか？　今の世の中、昔と比べて、どんなことでも可能ですか？　その気になれば、何でも出来ますか？　生き方は定められていないですか？　本当に、そう思いますか？」
珍しく吉野は饒舌で、挑戦的な口調だった。鬼のこととなると、彼はいつもよく喋るようになる。道成寺刑事は、それに聞き入っていた。伊吹も、口を噤んでいる。
「確かに、決められたルール自体は、昔とは比較にならないぐらい少ないのだろうと思います。見かけ上は、自由に生きる余地があるんだろうと思います。それは俺にも分かります。でも……選択肢はあっても、それが選びようがない、っていうことって、あるんじゃないですか？　ルール上はいろんな生き方を選べる、でも実際にその選択の状況になってみると、ホントは一つの生き方しか選べなかった。そういうことって、多いですよね。そんなのって、ホントに自由って呼べるんですか？　結局選べないのに……『誰でもどんな生き方でも出来る、昔とは違う自由な世の中』っていう風に、綺麗なレッテルは貼ってあると思いますよ。でもそれは、ただのラベルです。中味は別物ですよ」
吉野はあくまで、淡々と話す。その声の響きは、周囲に立ち昇る祭りの興奮からはずっとかけ離れていて、まるで別世界の、聴いたこともない音楽のように聞こえた。
「自由だ、って言われてるけど、所詮ホントは、自由じゃないんです。家族は捨てられない。生まれた土地は捨てられない。持っているお金は決まっている。時間は有限だ。行ける場所も限界がある。努力にも限度がある。体力にも限りがある。本心からイヤなことは出来ない。果てしなく頑張り

続けるのは無理だ。当たり前ですけど、無限大に自由じゃないんです。それは、ただの空っぽな理念でしかないんです。確かに、個人の努力次第では、『何でも』出来ると思いますよ。叶えられなかった人は、努力や我慢や割り切りが足りなかった人ですよ。その通りです。出来る人には、出来るのだから……出来なかったのは、お前が悪かったんだ、お前の心が弱かっただけだ、可能性はあったはずなんだ、よくそう言われますよね。でも、そういう言い方で結局、本当の本当は自由じゃないってことが、隠されているだけのような気がしてならないんです。俺は」

そんなことを話している吉野の顔は、不思議なほど普段と変わらなかった。

いつも通り真剣で真摯で、いいヤツの顔をしていた。伊吹がことあるごとにドキドキしてきた顔に、違いなかった。それだけに、伊吹はこんな重い言葉をどう受け止めてよいか、分からなかった。

「自由に生きられなかった人ってきっと、ほんのちょっと心が弱かっただけだと思うんですよ。後一歩のところで踏み込めなかったり、逆に逃げ出せなかったり。そういう心の弱さって、優しさにも繋がるはずだと思うんですけど、でもそういうのって、今だと否定されちゃうんですよね。心が弱いお前が悪いんだ、の一言で。それで、その心の弱さって、ホントに表裏一体の気がするんです。俺のイメージだと、心が弱いっていうのは、皮膜が薄くて弱い、っていう感じなんですよ。『こころ』っていう液体みたいのが詰まってる袋が、胸の辺りにあって、人によってその袋の厚みが、ビニール袋ぐらいだったり革袋ぐらいだったりするんです。革袋ぐらいの人は、ちょっとやそっとのことでは袋が破れないんで、中味がこぼれちゃったりすることもなくて、色んなことを成し遂げることが出来るんです。でもビニールだったり、下手すると紙だったりする人は、もうちょっとした衝撃にも耐えられないんです。だから、袋が破れないよう普段から、細心の注意を払って生きています。だから、何も成し遂げることが出来ないんです。でも……どうしてもそんな自分の生き様が耐えられなくて、許せなくて、無理をしてしまったとき。そんなとき、薄い皮の袋は破れてしまうんですよ。破れてしまったが最後……中味は外へ飛び散って、滅茶苦茶になってしまう。一つだったはずの『こころ』が形を取れなくなって、ま

さに異形と化してしまって、『こころ』を失い、そして、人でなくなってしまう。そんな姿を、今のこの世界の『鬼』って呼んだら、駄目なんですかね」

吉野はそう言って、長い話を終えた。

幸い、と言うべきか、きちんと聞こえていたのは隣に立っていた伊吹と、話しかけられていた道成寺刑事だけのようだった。紅葉や紺や澄哉や、みわ、ほたるは、喧噪に遮られてあまり聞き取れなかったらしい。何の話をしているのだろうかと、首を傾げている。

その中でまっすぐな目でこちらを見ているのは、すぅくんだけである。

「……なるほどね」

道成寺刑事は、ゆっくりと頷いた。

「いい話が聞けたよ。うん。そうかも知れない。わたしはこういう性格だからさ、頑張れば何とか出来るとか、すぐ思っちゃうんだ。ちょっと自分中心で考えすぎてたのかも知れない。勉強になったな。また、しっかり考えてみるね。ありがとう。吉野くん」

「いえ」

吉野はそこに至って、少し照れたような表情になると、俯いてみせた。

すると道成寺刑事は、急ににやりと笑って、今度は伊吹に話しかけてきた。

「ステキな彼氏じゃん。いい男捕まえたね」

「は、はぁ!? な、だから彼氏では……」

「まあまあまあ。今時こんなはっきり物を言える男、いい大人でも滅多にいないよ、実際。頭もいいし、尾津野さんとも釣り合い、取れるんじゃない？　あーでもね、心をゆだねるのと、身をゆだねるのは別だからね、そこ注意。夏祭りの熱気と興奮に導かれて、何でもかんでもさらけ出したら駄目だよ。初体験は、大切に」

「な、な!?」

急転直下で話題が変わりすぎて、伊吹はついて行けない。しかし道成寺刑事は、チッチッチ、と人差し指を左右に振って、何やら遠い目をした。

「お姉さんは、自分の人生経験からアドバイスしてるのよ。ああ、若き夏の日の、一夜限りの情熱。保証してもいいけど、その彼の肩掛けの中には

コンドームが入ってるね。間違いない。男ってそれぐらい一足飛びだから。もちろん吉野くんは、わたしの記憶の中のろくでなしみたいに、夏が終わったらハイさようなら、なんて男じゃないとは思うけどさ。人生プランは堅実に……彼には、気を付けなさいね」

伊吹の顔をまっすぐ覗き込んで、道成寺刑事は告げた。

「じゃ、お姉さんはまた警備に行ってくるから。みんなお祭り、楽しんでね。じゃね～」

そしてそう言うと、嵐のような刑事は、人混みの中へと消えていった。

紅葉や紺、みわがきょとんとしているのをよそに、伊吹は一人でもうパニックだった。パニック状態のまま、噂の吉野の肩掛けをちらりと見、そして、吉野の顔を見上げる。

「な、なあ……まさか、その……」

すると、吉野は気まずげにすっ、と視線を逸らした。

伊吹は真っ赤になった。

7.

のっけから一波乱あったものの、その後の祭りは、楽しいことばかりだった。みわは露店でたちまちのうちに八月分のお小遣いを使い果たし、ほたるに借りようとして断られていた。紅葉はすぅくんに射的や金魚すくいをやらせてやったが、そのどちらでもすぅくんは人間離れした集中力を発揮して、片っ端から弾を的に当てたり、何尾も金魚をすくって店のおじさんを困らせたりしていた。

さらに、どこで手に入れたのか分からないが、紺がいつの間にかビールを口にしていて、酔っぱらった挙げ句、脚をふらふらさせて人に衝突しまくっている。すっかり保護者役になってしまった澄哉は、一生懸命正気に戻そうとしていたが、全くの無駄だった。

一人落ち着いていたのは、吉野だった。彼は終始、伊吹の隣で一緒に祭りを廻っていて、綿飴や飲み物を買ってきてくれる。おかげですっかり楽しくなってしまった伊吹は、一軒一軒露店を覗き込んでは、これは何だ、あれはどういうものだ、と吉野に話しかけていた。

珍しくはしゃいでいる伊吹に驚いた表情の吉野は、こう尋ねた。
「どうしたんだ伊吹。そんなに夜店が珍しいのか？」
「……だって、私は日本の祭りに来るのは初めてだ」
「え!?」
吉野はすっとんきょうな声を上げる。伊吹はきょとんとした。
「言わなかったか？　小学生の間、日本にいるときはずっと東京にいたし、アメリカに移ってからも、ハロウィーンやイースターやクリスマスぐらいしか知らない。映画や小説でこういう日本の祭りの情景は見たことがあるが……実物は、今日が初めてだな」
「なんだよ。先に言ってくれりゃもうちょっと盛り上げたのに。りんご飴とか喰ったことないわけ？　ヨーヨーすくいとか。ていうか……打ち上げ花火を見たことはあるか？」
「手に持つ花火なら、小学生の時一回やった憶えがある。打ち上げはない」
「信じられんねーなあ……」
そう言った吉野は、すぐに伊吹の手を引くと、あちらこちらの露店へとより積極的に連れ歩いてくれた。伊吹にとっては、どれも新鮮に感じられて仕方なかった。他愛もないゲームではあったけれど、でも祭りの場では、これぐらいの内容がちょうどよいのだろう。日もすっかり沈み、人出がますます増える中、伊吹は心から、祭りを楽しんでいた。
そして、ついに盆踊りが始まる。
和太鼓と手拍子、かけ声、舞台上で唄われるしゃがれた節回しと共に、櫓の周りを円で囲った人々が、ゆるゆると踊り出した。参加しているのは多くが中年以上の大人だったが、時折若い姿もある。
不可思議なその踊りに唖然とした伊吹は、吉野に訊いた。
「これはなんだ。宗教上の儀式か？」
「違……いや、違うこともないか。うーん。確か一応元々は、お盆に先祖の霊が帰ってくるから、それを迎える、慰めるみたいな目的だったんじゃないかなあ。でも、今はそんなこと意識してる人はいないと思うぞ。ただ踊ってるだけ」
「ふうん……」
伊吹は感嘆する。伊吹の眼からすると、その踊りはずいぶんと不可思議

に見える。心が沸き立つわけでもなく、曲のメロディも単調である。そもそも踊りと言っても、手足や上半身を少しばかりくねらすぐらいで、こんなものを踊っても楽しいのか疑問に感じられた。

けれどやっているおじさんおばさんたちは、それなりに愉快そうにしていた。これが日本の、文化というものなのだろうか。伊吹にはよく分からない。

「おっしゃあ！　いぶちゃん、行くで！」

その時、伊吹は唐突に背後から大声で呼びかけられた。

かと思うと、片手を問答無用で紺に握りしめられた伊吹は、砂浜の櫓の方へと無理矢理連れて行かれる。荒いコンクリートの階段を足早に下り、そのまま盆踊りの輪の中へと、引っ張り込まれそうになる。

「ちょ、ちょっと待て紺！　私は別に踊りに興味は……そもそも、やったことなどない！」

「ほんなんどーでもええやんけ～。お堅い娘やなあ。適当に、好きに踊っといたらええやん。それともなんや……うちの誘いには乗れへん、とでも言うんちゃうやろなあ」

そう言って紺は顔を近づけ、すごんでくる。怖くはなかったが、伊吹はそれよりも、紺の息の匂いの方が気になった。

「……酒臭い。お前また呑んだのか」

「あっはっは～。いぶちゃんとこのあの和尚さんにおごってもらったわ。顔の割にあの人優しいな～。けけけ。ほな行くで」

言うなり紺は伊吹を引き連れて、踊りの中へ入り込んでしまう。もうどうにも出来ないので、伊吹は周りの見よう見まねで踊り始めた。

考えてみれば生まれてこの方、踊りとかダンスとか名の付くものをやった憶えがない。しかも、踊りながら前へ進んで輪を廻す、というのは、いざやってみると思いのほか難しかった。ほんの数分前に舐めて考えていた自分は、誤解していたらしい。

「お姉ちゃ～ん、頑張って～」

そんな声に振り向くと、少し離れたところで踊っているのは紅葉とすぅくんである。紅葉は意外なほど上手く踊っていて、周囲のおばさんたちの中にも溶け込んでいた。若くて動きがしなやかな分、よく目立っている。

輪の周りで眺めているおじさんたちからも、紅葉に向かって拍手や歓声が飛んでいた。言われてみると、なかなか色気もあって艶めかしくも見える。

一方すぅくんはラジオ体操と同様、何となく雰囲気で踊っていた。動き自体は周囲と全然違っているのだが、なぜだか誰よりも、自然で楽しげに見えた。小さい身体を全力で動かして、コミカルで可愛らしい。紅葉とは違った意味で、歓声が上がっていた。

「お、いぶき姉も踊ってる。すっげー。レアだ」

「伊吹お姉ちゃぁん……」

見れば、みわとほたるも輪の中に加わっていて、こちらに手を振っている。確かみわは、都会的なものにしか興味がない、と言っていたような気がするのだが、その割にはノリノリで踊っていた。楽しければとりあえず何でもよいのだろう。ただ、その踊りは盆踊りというより、ドジョウすくいをふざけてやっているようにしか見えなかった。他方でほたるは、彼女らしい控えめな身動きで、しかし正確に踊っている。桃色の浴衣がよく似合っていた。

いっぱいいっぱいになりながらも踊っているうち、次第に伊吹の心の中には、独特の一体感が生まれつつあった。見ず知らずの人々の輪の中に入って、踊りを踊る。考えてみれば、伊吹にとってこの上なく苦手な状況だったのだが、いざやってみると、それほど不快ではない。それよりも、土地の人たちと一緒に時間を共有している、という感覚が、温かく新鮮な気持ちを呼び起こしてくれた。

伊吹はこれまで、暮らした土地に帰属意識を感じたことはない。あくまで「その時住んでいる場所」でしかなく、ご近所づきあいのようなものも経験していない。こくりの市に越してきた当初、紅葉が近所の人々みんなと知り合いである、ということに、ずいぶん驚いたものだった。そしてそれを、少々気味悪くも感じた。そんなベタ付いた付き合いは、自分の生活の自由度を損なう気がしてならなかったのだ。

しかし今、伊吹は楽しんでいた。見知らぬ人と時折ぶつかり、頭を下げて謝りながらも笑顔を浮かべ、そしてゆっくりゆっくりと踊っているこの時間を、愉快に感じていた。

こんなことは今まで、一度だってなかったことだった。

ふと、伊吹はつい先程までいた、階段上の道路を見やる。
吉野が、こちらを見ていた。
伊吹は自然と、彼に笑いかける。
時間が独特のテンポで流れる中、伊吹はゆったりと、盆踊りを続けた。

8.

そして、祭りも終盤に近付く。和太鼓や拍子も止まり、拍手と共に盆踊りが終わりを迎えると、人々は砂浜に並んで、海の方を見つめだした。ここへ来て、吉野も階段を下りて、伊吹のそばまでやってきた。同時に、紺や澄哉、紅葉やすぅくん、みわやほたるも近寄ってくる。
「何とか花火が無事に始められそうで、よかったね」
口火を切ったのは、意外にも澄哉だった。紺が尋ねる。
「無事にって、何かあったん？」
「いや、今日って天気予報悪かったじゃない。実際、夜遅くには降り始めるみたいだよ。湿気も多いでしょ？」
「えー、せやったん？　危なっかしいなあ」
多少は酔いが覚めたらしい紺はうめいた。確かに、時折空がゴロゴロと低い音を立ててはいた。月は何とか出ていたが、星影はあまり見あたらない。
次第に、人の数が増えてきた。盆踊りでずっと砂浜にいた伊吹たちは、初めは花火が見やすい辺りにいられたのだが、段々その前に人が詰めかけるようになってきて、海が見づらくなってくる。人に押されながら、紅葉が嘆きの声を上げた。
「あーん。こんなんやったら、さっきのお兄さんらと一緒に行ったらよかったわぁ」
「さっきのお兄さん？」
伊吹が問うと、紅葉はうん、と頷いた。
「なんかな、盆踊り終わったらすぐに、大学生ぐらいのお兄さんらが三人ぐらい寄ってきてな、あっちの方に花火見やすい場所があるけど、一緒に行かへん、って誘ってくれたん。みんなと一緒に見よと思てたから断った

んやけど、こんなんになるんやったら、あの人らに場所教えてもらったらよかったかなあ」
「もみじ姉、それナンパ」
半目になって呆れたみわが、そうツッコミを入れた。
「ついてかなくて正解だって。マジ何されるか分かんないよ」
「されるって、何を？　花火見に行くだけやん」
「いやだから、どっか人影のない岩場とかにつれてかれて……」
「何でもいいから。紅葉、絶対そういうのにはついていくな。いいな」
ろくでもないことを言い出しそうなみわを遮ると、伊吹は紅葉にそう言った。
すると、その瞬間――。

空に、大きな光の華が開いた。

少し後に、どん、という鈍い音が響く。
「わー、始まった！」
紺が手を叩いて喜ぶ。周りの人混みからどよめきが上がり、誰もが空を見つめていた。大人も子どもも、普段抱え込んでいる雑事を忘れて目を輝かせ、心から幸福そうな表情を浮かべている。
そして伊吹は小さく口を開けたまま、大きな打ち上げ花火を、全身で感じていた。
それは、伊吹が思っていたよりもずっと大きく美しく、たくましく、力強かった。写真や映像で見ている間は、よくできたＣＧのようなものが空に浮かび上がる、ぐらいにしか想像していなかったのだ。それぐらいならば、家でＣＧを見ている方がよくないか、とすら思っていた。しかし実物は、そんなちんけな作り物とは比較にならなかった。
また一発が打ち上げられる。細かく散った一つ一つの火花が、また細かな破裂を起こして、フラクタルな図形のように空へ広がった。
どれだけ厳密な演算を行ったＣＧでも、人が理屈で考えた物には限界がある。こうすれば美しい、ああすれば見栄えがよい、という計算の元に動く光の粒は、どうしても、予想の範疇を超えないものだ。

しかし、現実に高い空で破裂する花火は、微細な風や空気の流れの影響を受けて、微妙なぶれを生じさせる。視認できない程度の微かなぶれ方であったとしても、それが無数に積み重なると、理論や計算を越えた、意外性を生み出す。そしてそれが、数字では再現不可能な美へと繋がる。

伊吹がこれまでの人生で美しいと感じていたのは、いわば、シンプルな数式のそれだった。無駄なく、厳密で、正確無比。そんな美しさをずっと愛してきた。

けれど、今目の前に展開される花火の美は、それとは対極にあるものだった。人と自然の作った、不確定の美しさ。

伊吹はただただ、ぼう、として、空を見つめていた。

そのとき。

不意に左手を、小さな手に握られる。

見ると――すぅくんが、伊吹の手を取っていた。

すぅくんは伊吹の顔を、あどけない表情で見上げている。

ここ一週間ほど、彼と親しく触れ合うことはなかった。嫌われてしまったのだろうか、と心配していた伊吹にとって、こんな嬉しいことはなかった。すぅくんは何も言わず、伊吹の顔を見ている。

そして彼はにっこりと、笑みをこぼした。

すぅくんの手は綺麗で、柔らかかった。

それから伊吹は、このままではすぅくんが花火を見られないとに気づいた。すぅくんの背丈だと人混みの中では、人と人との合間からしか花火は見られないだろう。とりあえず、おんぶかだっこでもしてやればよいだろうか。しかしそれでも、伊吹の身長では、それでもあまりよくは見られないと思う。どこかすぅくんを連れて、高台にでも行ってやらなければならない。

出かける前の、曾祖母との会話を思い出す。

――この子を、私は大切にしてやらなければならない。

伊吹は、ぎゅっとすぅくんの手を握りしめた。

「……伊吹」

すると。

そばから、そんな囁く声が聞こえた。

「え？」
伊吹が見たそこには、吉野がいた。
吉野は、伊吹の右手を取ると、また小声で言う。
「……ちょっと、いいか」
「え、でも……」
「メールしただろ。大事な話があるんだ」
真剣な顔の吉野は、伊吹の眼をまっすぐ見ている。伊吹は、目をそらすことが出来ない。
そして吉野は、伊吹の手を引いて、人混みを抜け出そうとした。
「あ……」
伊吹は、左手の中の、すぅくんの手を放してしまう。
たちまちすぅくんは、大人たちの中に消えていく。
「こっちだ」
吉野は、そう言っている。
伊吹は、後に残してきたすぅくんの姿を眼で探しながらも、吉野に言われるまま、隠野の砂浜を抜けていった。
すぅくんの他は、誰も二人が去ったことに、気づいていなかった。

9.

「……あれ？　いぶき姉は？　あれー？」
「さっきまでおったやん。お姉ちゃ～ん」
みわと紅葉が最初に気づき、周囲を探す。すると、それに呼応して、澄哉が言った。
「吉野もいないよ。どこ行ったんだろう……」
「はは～ん。ついに二人して、アバンチュールに出かけたか。ふぅぅん」
紺が口元をつり上げて言う。ほたるは何も言わず、不安げな眼をして、辺りを見まわしていた。
「なあ、お姉ちゃん……」
「ん？　何？」
ほたるの言葉に、みわが何気なく応える。

ほたるは雑踏と花火の音の中、少しだけいつもよりも大きな声を出して、こう言った。
「すぅくんもおらへん……」
「え？　誰が手を繋いでた？　放しちゃったの？」
「ついさっきは、伊吹ちゃんが一緒だったと思うよ」
みわの問いに、今度は澄哉が答えた。紺が首を傾げる。
「うーん？　すぅくんも連れてったんか？　ほんならあーんなことやこーんなこと、しに行ったわけとは違うんか。あれぇ？」
「こん姉こん姉。あーんなことってどーんなこと？」
にやにやして尋ねるみわに、まだ頬の赤い紺もにやにやして教えようとし、紅葉も興味を示して聴こうとしている。澄哉は耳を塞いでよそを向いていた。
一人ほたるだけが、三人の行方を心配して、辺りを見まわしていた。

また一つ、大きな花火が空に上がった。